福生の自由民権運動

――近代史の視点――

新井勝紘

西多摩の民権運動

民主々義の実現を求める全国的な規模の運動として、日本で最初のものであるといわれる自由民権運動は、一八八〇年代（明治一〇年代）を中心に、約一〇年ばかり続いた。全国の農山漁村の草の根に、自由と民権を学ぶ学習会や討論会が簇生し、「学習熱が燃えあがった時代」といわれている。西・南・北の多摩三郡も例外ではなかった。一八九三（明治二六）年に東京府に編入されるまで神奈川県であった三多摩は、自由民権運動のひとつの拠点でもあった。自由党員は県下二八四名中の一五八名、半分以上をしめていることからわかるように、運動は各地の豪農層をまきこんで活発に展開した。なかでも南多摩郡は野津田・小山田・原町田・八王子・大塚・日野などに、北多摩郡は府中・調布・奈良橋・蔵敷（ぞうしき）などに、政治や学習の結社が組織され、演説会や討論会が頻繁に開催された。

それでは西多摩の動きはどうだっただろうか。なんといっても秋川の奥、五日市町を中心とした周辺各村の運動が、ひときわ輝いている。町長以下、県議、戸長、村用掛、学務委員、教員などがこぞって参加し、地域ぐるみの運動を展開した地域として断然抜きんでている。そこからは〝民衆憲法〟とも呼ばれる、人民の権利を保障し民主々義を基本にした「五日市憲法」が生まれた。この憲法草案は自由民権運動の中で創造された七〇近い私擬（しぎ）憲法の中でも、誰の手も借りないで住民自らがつくった憲法として、今日では高い評価を得ている。この背景には数多くの学習結社や

活動家（とくに自由党員）がいたことはもちろんである。西多摩郡の中でも中核的な役割を果したといえよう。三町一四ヶ村から参加者のあった「学芸講談会」は、五日市憲法を生み出す母体となったわけである。

ところで、こうした五日市の運動は、西多摩の各村にどんな影響を及ぼしているだろうか。これが意外にも、周辺部では五日市の傘下になく、別個の動きをしているのである。

たとえば隣接する秋川流域の村々（現在の秋川市域）の場合、『秋川市史』の「自由民権運動」（拙稿）という項目で触れたように、五日市の政治的な組織にはほとんど参加していないという事実がある。瀬戸岡村の瀬戸岡為一郎や引田村の中西仲太郎らは独自の組織を作って、「政治思想を鋭敏」にする活動を展開していたし、また、青梅や福生の連中とのグループづくりを目論んでいた気配がみえる。つまり多摩川流域とのつながりを求めたといえよう。

このようにしてみると、このころ福生にもし自由民権運動というものがあったとすれば、このラインの上にあるのではないかと推測されよう。

秋川流域の政談演説会

すでに『秋川市史』で明らかにしたように、秋川の二宮村の戸長で神奈川県会議員でもあった静原寛十郎のつけていた『冏耕日記』（一八八三〈明治一六〉年一月～一二月迄）に、この辺の事情がかなり詳しく記述されている。現在のところ、残念ながら福生市域内から関係文書が発見されていないので、まず輪郭だけでもつかむために、この日記の中で明らかになっている動きを、原史料を紹介しながら追ってみる必要がある。

まず一八八三（明治一六）年五月のことである。青梅町の初音座で、「民権派ジャーナリスト」や「都市民権派」と呼ばれている末広重恭・西村玄道・城山静一ら知識人や新聞記者を招聘して政談演説会を開催しようという動きが、瀬戸岡村の瀬戸岡為一郎を中心におこり、その準備のためにしばしば会合が開かれているが、その会場に牛浜の「虎屋」が使われている。

「余ハ（注、静原のこと）政談開設一件ニツキ、午後二時頃ヨリ平野氏ト同道、牛浜虎屋ニ会セリ。本日相会スル諸氏ハ村山、田村金右衛門、塩野正作、秋山佐七、瀬戸岡、内田嘉右衛門、野口正吉、瀬沼勝太郎ノ数氏ナリキ。先ツ決議ハ幹事惣代ヲ撰挙スルニ平野、田村、村山、瀬戸岡、静原ノ五名、場所ハ青梅町初音座ニ開キ、後懇親会ヲ開クニ決セリ。小懇親会ヲ開キ午後六時帰宅セリ」（五月九日）

ここに集まっているのは、各村の戸長クラスばかりであるが、福生地域からの参列者はいないようである。ただ牛

浜を会場としていることから、この会合の様子や情報は、たぶん牛浜・福生・熊川などの各村の戸長の耳にも伝わったのではないか。大いに刺激をうけたことが推測される。結局、この政談演説会は、末広から「弁士病気」という書翰が届き、秋まで延期となってしまう。

再度動きがでてきたのは、この年九月以降になる。九月七日に自由党員の会議が鶴岡亭であり、意見の対立が表面化するが、この内紛を聞いて福生村の田村半十郎が登場する。

「田村半十郎氏偶然来訪セリ。氏語テ曰ク、過ル七日ノ会決セサルヲ憂ヘ……（後略）」（九月一二日）

田村と静原とはしばしば交流しているようで、七日の議論にも、田村が強い関心を抱いていることがうかがわれる。この日、静原は瀬戸岡（自由党員）と坂本次郎左衛門から自由党への加盟をすすめられているが、断っている。田村も党員ではない。

このことがあって二ヶ月後の一一月、いよいよ政治組織をつくろうとする動きと、五月以来延期されていた政談演説会とあわせた懇親会開催の声がでてくる。

「坂本次郎左衛門、瀬戸岡為一郎ノ二氏来訪シテ曰ク、政党ノ結団ノコトヲ以テス。余賛成スルヤ否ヤハ、来ル十六日ノ下評議ニ於テナスベシ」（一一月一二日）

一六日の会議とは、青梅での懇親会のことを指している。

田村半十郎と「政事研究所」

ちょうど同じ頃、この政党組織とは別に、福生の田村半十郎は「政事研究所」設立を企てていた。

「田村半十郎氏、政事研究所設立ヲ以テ余ニ謀ル。余思想ヲ語ルニ氏ト符合セリ。ヨッテ其目的方法ノ大綱ヲ定メテ分ル」（一一月一五日）

田村は静原に自分の計画を打明け、意見の一致をみた二人で、その大綱を決めている。これ以後、田村と静原は会員募集のために、西多摩郡内各地を積極的に遊説している。まず田村は、一六日に青梅にまわり、旧知の連中に会って加入を呼びかける。一九日には氷川辺まで出向いている。静原は自分の村の周辺をかためるために、小川村、野辺村、草花村、平沢村などを遊説し、会員五人を獲得してくる。二〇日には、田村と静原が中心になって会旨と会則を定める。その後、政党組織をつくろうとして頓挫した雨間村の平野太郎右衛門らにも呼びかけるが、拒否されている。瀬戸岡は田村の計画に同調し、一緒に五日市まで遊説に行っている（一一月二一日）。さらに田村と静原は、箱根ヶ崎村、菅生村、引田村などにも出向き、会員獲得に奔走している。『罔耕日記』に出てくる会員には、瀬沼（油平村）、代継（代継村）、西原武三（引田村）、小宮尚光（草花村）などがいる。

「午前、田村半十郎氏、政談会員募集ノ件ニ付来訪。種々協議ノ末、諸項決シテ去ル」（一一月二九日）

「午前、田村半十郎氏ヲ訪ヒ、来ル五日集会開設ノコトヲ謀ル。論定リ同氏ヲ辞シ、草花村小宮尚光氏ヲ説キ、説ニ同セリ。ヨッテ来ル五日集会ヲ約シテ去ル」（一一月三〇日）

こうして、一二月五日に念願の初会合を開く。場所は福生村長徳寺、参会者五〇余名と日記にある。田村が「政事研究所」の構想をたててから、一ヶ月もない。この間東奔西走して集中的に遊説して歩いたことがうかがわれる。

「本日ハ学術会規約開議ヲシテ初メテ福生村長徳寺ニ会ス。相会スルモノ五十余名ナリ。田村半十郎氏仮リニ会長ノ席ニ就キ、審議条例ヲ定メ午後七時散会ス」（一二月五日）

田村が仮に会長となって、この会をとりしきっている。この席でどのようなことが議論されたかは不明であるが、ともかく、福生村にひとつの政治結社が誕生し、活動がはじまったことは確かである。そしてそれはまた、立憲改進党系につらなるグループであったようである。

田村・静原の活動とその評価

このころ、自由党と改進党は激しく対立し、自由党は「偽党撲滅」といって、各地で改進党を攻撃していた背景もあって、明治一七年三月六日付の『自由新聞』では田村と静原の動きを次のように伝えている。

「青梅町の有志者には、先きに神奈川県下西多摩郡人民の政治思想に乏しきを憂ひ、時習社と称する一社を設けて討論講学を研究せり。然るに田村某、静原某の如き徒は、例の改進党派の人物にて、曖昧（あいまい）と狡獪（こうかい）とを以て主義とするが如きものなれば、之れが為め、何分にも頭を擡（もた）ぐること能はず、種々奸策を運（めぐ）らせし末、全く自由党を賛成するが如く見せかけ、其力を仮りて我が党勢を張らば、遂には時習社の如き自滅するに至らんと、瀬戸岡村の自由党員瀬戸岡為三郎（ママ）氏の許に臻（いた）り、甘言以て之に説き、意外の賛成者を得て、昨年十二月懇親会を開き、向後は定期会をも開く事に議定したれども、這は是れ一時の策にして、其後已に第一回に於て議定したる会費を以て弁士招待費に充て、東京よりして島田三郎氏を招聘せんとするの噂頻りなる所より、郡内正義の徒は大に憤り、其期日に至らば一と泡吹かせ呉れんと扼腕して待つとも知らず、去月十九日、青梅町坂上楼に会合せり」

ここで注意しておきたいのは、この記事は自由党の立場で、一方的に改進党系につらなる人物とみられる田村・静原を斬っているということである。田村・静原の意図した「政事研究所」なるものの実態は、まだ明らかにされていない。ここで使われている「曖昧と狡獪」という言葉は、

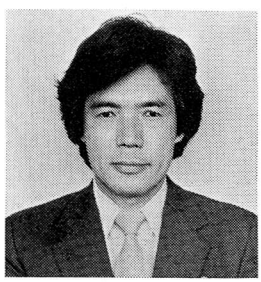
自由党が改進党を攻撃する時の常套語であることも頭に入れておく必要があろう。まず、この結社の規則や会員名簿などの基本史料の発見に努めなければならない。それができてはじめて、歴史的な位置づけをすることができると私は考えている。

ただ、この記事の後半部分で、五日市の民権運動の指導者格で自由党員の馬場勘左衛門、深沢権八、大石亨らは、ゲストの島田三郎や田村らを前に、「偽党攻撃の演説」をしたことを報じていることから、自由党傘下の五日市と改進党系の人物に接触している田村らとは、決定的な断絶があったことは事実である。同じ民権運動の中で、こうした分裂がおこり、それが地域レベルでも激しく対立し、お互いになじりあう状況を呈していた一例でもある。

この時期、同じ『罔耕日記』は、松方デフレの影響をうけた農村不況と農民の極端な窮乏化の赤裸々な実態を記録している。いったい民権家や村の指導者たちは、これをどのように見、うけとめていたのだろうか。福生の自由民権関係の史料の発掘とともに今後の課題である。

このように福生の近代史は、まだほとんど明らかになっていないといってよい。『福生町誌』に「近代」という項目が欠落していたように、明治・大正・昭和と続く近代百年を、民衆史、民衆運動史、社会運動史、庶民生活史という視点を入れて、これまで取りあげられたことのないテーマにも、大胆に踏みこんでいきたいと考えている。それも市史に関心をもつ市民の皆さんとともに、一緒に学びながらやっていきたいと考えているので、「市民の市史づくり」にぜひ積極的な参加をお願いしたい。

市史編集専門委員の横顔



新井（あらい）　勝紘（かつひろ）

「近代」担当

昭和一九年福生市生れ。

福生市在住

東京経済大学卒。

在学中に五日市町の深沢家土蔵から「五日市憲法」を発見し、三多摩の自由民権運動の研究を続ける。町田市史編さん室勤務。福生市文化財保護審議委員。

〈著書〉『民衆憲法の創造』、『明治大正図誌・関東編』など。また『五日市町史』・『秋川市史』執筆。